



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	雑報
Citation	北大法学論集, 48(2), 193-196
Issue Date	1997-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15722
Type	other
File Information	48(2)_p193-196.pdf



北海道大学法学部法学会記事

○一九九六（平成八）年九月十七日（火）午後二時より

「スコットランド啓蒙思想の源流

——利己心はどこからきたか」

報告者 水田 洋氏

（名古屋大学名誉教授）

出席者 三五名

1 スコットランド啓蒙思想とはなにか

一七〇七年のイングランドとの合邦の頃から、一七八九年のフランス革命の頃までのスコットランドの近代化をめぐる一連の思想のことを指す。スコットランド啓蒙思想は、フランス及びドイツの啓蒙思想に対応し、それらと合流した。対照的に、イングランドには啓蒙思想は存在しない。

2 研究史

わずかに一九六七年から三十年ばかりの研究史しかない。

(1) 前史

水田氏は、わが国に社会思想史という分野を誕生させ定着させた方であり、ご専門のイギリス思想史研究のリーダーであるだけではなく、戦後の日本市民社会論を理論的にもあるいは実践的にも支えたおひとりである。以下のような流れで報告がなされた後、活発な議論が展開された。なお、本講演は思想史研究会との共催で行われた。

アダム・スミスとデイヴッド・ヒュームに関しては、個別研究がかなり重ねられていたが、その他の思想家については、トップ・クラス数人について数点の研究が存在するにすぎず、集団としての研究は、皆無であった。この時期の主要な研究者・研究書としては、ロイ・パスカル（一九三八年）、グレイディ

ス・プランソン（一九四五年）、千代田謙（一九四五年）をあげる事が出来る。

このような前史の中で、なぜ一九六七年以降スコットランド啓蒙哲学研究がリヴァイヴァルしたのかについて、考えなければならぬ。

(2) 日本のアダム・スミス研究 一九三八年——一九五四年

この時期の日本のスミス研究は、講座派および大塚史学の影響が強く、マックス・ウェーバーの思想を介した研究が主であった。

(3) 一九六七年以降

この時期に、グループとしてのスコットランド啓蒙思想に対する関心が急速に高まる。

国際十八世紀学会で、相次いでスコットランド啓蒙思想が取り上げられる。特に 'Towards a Definition of the Scottish Enlightenment' のタイトルで行われた一九七五年のニューヘイヴン大会の影響は大きい。その他にも、一九七六年から八七年にかけて、グラスゴウ版のアダム・スミス全集が刊行されほか、一九八六年には ECSSS が創立されたり、スコットランド啓蒙の舞台となったグラスゴウ、エディンバラ、アバディーンでそれぞれ二回の国際学会が開かれた。

日本でも、経済学史学会・社会思想史学会・日本十八世紀学会において、スコットランド啓蒙哲学が取り上げられる。

この時期に研究が急速に進んだ理由としては、いうまでもなく J・G・A・ポークックの名著『マキャベリアン・モメント』（一九七五年）におけるシビック・ヒューマニズムパラダイムの提唱の影響が大きい。その後 D・フォープスによる反撃もあり、現在に至るまで、スコットランド啓蒙哲学をめぐる議論は基本的に、シビック・ヒューマニズムと自然法学という二つの軸の中で展開されている。

このいわゆるポークック・パラダイムをめぐるのは、イグナティエフ&ホント『富と徳』（一九八三年）を一応の成果として、その後は個別研究へと進み、現在も盛んに展開されている。その後はポークック・パラダイムとの距離により、三つのグループに分けられる。ポークック・パラダイムに親和的なものとしてはドワイヤー、ホーコンセンのものを、反対するものとしてはスキナー、チトニスのを、中立的なものとしてフィリップソン、ロス、ホントのものをあげることが出来る。

3 源流としての可能性

(1) シビック・ヒューマニズム

周知のように、ポーコックは、マキャヴェルリからハリントンを経てスコットランドのフレッチャーへという流れの思想的系譜を強調した。ただし、ジェイムズ・ステュアートの『経済学原理』（一七六七年）に関しては、影響を明確に否定している点に注意すべき。

(2) ストア哲学

新ストア主義として当時の西ヨーロッパ全体に大きな影響を持つていた。この点は例えば、スコットランドの主要な図書館に所蔵されていた *Justus Lipsius* の著作の数からもその大きさを知ることが出来る。

(3) 大陸自然法

スコットランド法とローマ法の関係の深さは、つとに指摘される点である。これもまた、グロチウス、プーフENDORFの主要著作の所蔵数により、その影響を確かめることが出来る。また、カーマイケルによるプーヘンドルフ法学の編集（一七七八年）も大きな影響を果たしたといえよう。

なお、アダム・スミスの法学講義（Bノート）では、自然法学の代表者としてグロチウス、ホッブス、コッケイをあげているが、スミスにはホッブスは理解できなかった。ここで、自然法学と自然法思想とを混同してはいけない。

(4) 経済学——時論と理論

当時は体系化の試みが盛んになされていた。例えばジェイムズ・スチュアート（一七六七年）、フランソア・ケネー（一七五八年）の著作である。時論と理論が分裂した一つの典型はジョン・ロックであったが、このような体系化の試みの中にスコットランド啓蒙哲学の源流の一つを見ることが出来る。

(5) イングランド道徳哲学

イングランドには、ホッブス、ロックス、シャフツベリ、ハチスンという道徳哲学の流れがある。これは利己心の哲学者であるマンドヴィル批判を含むという点で特徴づけうるが、そこではマンドヴィル思想は否定しえてはいない。スコットランドへはハチスンを通じてこの道徳哲学の流れが継承された。ハチスンは多くの場合スコットランド啓蒙の中核的人物とされるが、ヒュームにとつてもスミスにとつても *Enlightenment* でありつづけたことに注意すべきである。ハチスン思想は、短命なアイアランド啓蒙思想と位置づけることもできる。

イングランド道徳哲学は、ヒュームにおけるホッブスの継承とハチスン批判として、またスミスにおけるマンドヴィル支持という形で受け継がれていく。

(6) カルヴィニズム

スコットランドでは宗教改革を経て、教会内では、ウィリアム、ロバートソンらモダレイツが勝利する。その中でストア哲学の影響を受け、孤立人の利己心と恵み深い神という観念が広がる。また他方で理神論・無神論への傾斜も見られる。国教会のラティテュディネリアンからも大きな影響があつた。

(7) 合流点

以上の源流の合流点としてアメリカ革命をあげることが出来る。これはまたスコットランド啓蒙思想のテストの場とも言いうるが、結局のところこのテストにもちこたえたのは、ヒュームとスミスだけであつた。

(文責 井上匡子)